

天理日仏文化協会こども日本語講座の取り組み⑨

5) 6年間の取り組みで見えてきたこと (前号よりの続き)

バカンスの国フランス

ここで、子供たちの通っているフランスの現地校の休暇のシステムと、本校の授業との兼ね合いについて、少し説明をおきたい。現地校の新学年度は、9月に始まり翌年の6月末に修了するので、本校も新学年度の始まりを9月とし、クリスマスや春休み、復活祭など主な休暇を区切りとして、1学期(9月～12月)、2学期(1月～3月)、3学期(4月～6月)の3学期制を取って運営している。

主な休暇以外にも、フランスの幼稚園と小学校は、8週間ごとに2週間の休暇を取る決まりがあり、学期の途中にもしばしば休暇が入る。さすがはバカンスの国フランスならではの制度で、それに合わせて両親も休暇を取り、田舎の別荘に出掛けたり、祖父母の家に預けたりする場合も多い。どうしても仕事が休めない親に代わって、学童保育やスキーや乗馬などが体験できる林間学校のような施設も充実しており、子供たちは思う存分バカンスを満喫できるようになっている。

ただ問題なのは、本校にはパリ市以外にも郊外の町や、車で2時間もかかる地方から通っている子供もおり、彼らが所属する学区(アカデミー)によって、毎年バカンスの時期が異なることである。その様々な学区から通ってくる約300人以上の全校生徒のバカンスが重ならないように考慮して、年間34回の授業日数を確保しなければならないのである。年度末が近づくと、担当者の小林氏は、インターネット上で公開される新学年度のバカンス情報を見ながら、水曜日と土曜日の授業日の調整に追われる。

国語教師勉強会に支えられて

ところで、週に一度しか授業日がない子供クラスは、1学期当たりの日数も10日前後しかない。1時限が90分間とはいえ、各クラスの担任はカリキュラムに沿って、教科書を読み進め、新出漢字を教え、成績表に評価を付け、学習発表会もして慌ただしく学期末を迎える。そんな時間的にも精神的にも余裕のない状態にもかかわらず、毎学期ごとに国語教師勉強会は続けられてきた。通常の授業前には、必ず簡単なブリーフィングも行っており、授業後には、常勤の担当者が、それぞれのクラスで起きた急を要する問題などの相談に対応している。スタッフのほとんどが非常勤講師で、フランス人男性と国際結婚をしている女性である。しかも、90分授業を3コマ以上も続けた後の午後6時半から始まる勉強会に、都合をつけて必ず出席してくれている。こうした熱心なプロ意識と、子供を思うボランティア精神に溢れた教師集団によって、本校は支えられているのである。

教師勉強会の内容は、まず、学習発表会など学校行事の打ち合わせや連絡事項を確認し、次に、各クラスの状況報告とともに、学習や行動面の指導に苦慮していることも出し合い、その原因や改善方法を考え意見を交換する。また、カリキュラムや、全校で取り組んでいる教科書の音読と漢字ドリルなどの成果と問題点を検討したり、各自が実践している楽しい授業作りや教材の紹介をしたりと話題は尽きず、いつも予定時間を越えてしまうのが難点ではある。実際に、1組で1年生の上下2冊の教科書を教えるには無理があるなど、カリキュラムの見直しも継続

して行っている。特に心がけたのが、多動が目立つ先天的な発達障害や、心に問題を抱える子供たちへの配慮を知ってもらうことである。私自身が小学校に勤務していたころに学んだ経験から、資料も配布して正しい理解を深めてもらうことができた。

なお、担任の手に余るほど落ち着かない子供や、学習に遅れが目立つ子供への対応は、学校側の担当者が教室に入って様子を観察した後に、保護者に今後の進路を相談することになっている。

「バイリンガルの子供」といえば聞こえはいいが、家庭では、両親や祖父母による教育方針や躾に対する文化の違いに戸惑い、両親の離婚や再婚などに翻弄されるなど、それぞれ複雑な環境の中で育っている子供も少なくない。また、現地校の教師の指導も、幼い頃から自分なりの意見を持たせ、個性を重んじるフランス流という中で、彼らなりに一所懸命に生きている。そして、人種のるつぼフランスでは、中国系、スペイン系、アラブ系など多国籍なルーツを持つフランス人も多く、家庭で3カ国語が飛び交うのも当たり前の光景である。

このような背景から、学習に支障が出ている子供たちの問題は、それらが複雑に絡み合っているのではないかと思われる。さらに、先天的な発達の問題を抱えている場合には、個々の発達に合わせた指導体制をとることが必要で、本校のような一斉授業には、抱えきれないのが現状である。

そうした見極めも容易ではないが、毎年、入学を希望する子供たちに対して、担当者が保護者と本人との面接を行い、ほとんど日本語を理解できない場合には、精神的な成長を待つ、中学生以上を対象とした、外国語として日本語を学ぶ「日本語科」へ進むことや、個人レッスン(家庭教師)などの方向で考えてもらうようアドバイスをしている。また、年度末には、国語教師勉強会で名前が挙がった進級が困難と思われる子供たちに対して、もう一度同じ内容を学び直すことによって、より楽しく授業を受けてもらいたいと考え、留年を勧めている。当初は、仲良くなった友だちと一緒に進級させたいと、留年を拒む保護者が多かったが、学校側の方針を説明するうちに、理解が得られるようになった。

学校側が責任を持って保護者に対応するのは、発達障害や能力差や家庭の問題など、プライバシーに関することもあり、当然のことである。こうした取り組みによって、各担任からも、時間的にも精神的にもかなり負担が軽減され、より集中してクラスの子供に向き合えるようになったと言われている。

取るに足らない経験から言うのもおこがましいが、よい学校を作るためには、まず、働く教師がお互いにの力を高めるために常に学び合い、働きがいのある環境を提供することが大切だと考える。そこから質のよい授業が生み出され、生徒が集って来るのではないだろうか。いうまでもなく、保護者が我が子を託したいと信頼するのは、天理日仏文化協会会長を中心に本校の教内のスタッフたちが、ひのきしん精神で日々勇んで勤めている姿と、温かいお道の香りが漂う雰囲気にあることも間違いのない。これから時代は、現在の在仏1世の子供たちから2世、3世へと移っていくが、国語教師勉強会を通して学んだ経験と知恵を生かして「天理の学校」の精神は受継がれていくと信じている。